

主日礼拝説教「わたしたちが一つになるために」

日本基督教団石神井教会 2018年5月13日

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 1章15～23節

¹⁵こういうわけで、わたしも、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、¹⁶祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。¹⁷どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、¹⁸心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。¹⁹また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。²⁰神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、²¹すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。²²神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。²³教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 17章1～13節

¹イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。²あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。³永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。⁴わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。⁵父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

⁶世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。⁷わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。⁸なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。⁹彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのもものだからです。¹⁰わたしのものはすべてあなたのももの、あなたのもものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。¹¹わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。¹²わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。¹³しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。

主イエスは天を仰いで…

主イエスのご復活を祝ったイースターから七週続いた「復活節」最後の日曜日の今日、週報の中で「復活節第7主日」と並んで「昇天後主日」と記してあるのにお気づきでしょうか。主イエスがご復活後、四十日を弟子たちと過ごされた後に天の昇られたことを記念する「昇天日」の直後の日曜日、という意味です。今年、先週の木曜日が「昇天日」でしたから、今日が「昇天後主日」。

ご復活くださった主イエスは、弟子たちの間に現れてくださったのですから、そのままいつまでもそこに留まってくださったらよかったようにも思いますが、事實はそうではありませんでした。四十日ちょうど、あの荒野の誘惑を受けられた四十日を思い起こさせる日数を弟子たちとお過ごしになられると、ご復活の主イエスは、弟子たちの目の前で天に上げられて、雲に覆われ、見えなくなってしまうわかれたと、使徒言行録(1章)は伝えています。その様子を描いた絵画は無数にありますが、そのとき弟子たちは、白い服を着た二人の人(天使?)に声をかけられるまでいつまでも、我を忘れるようにして天を見つめ続けていたようです。

今日の福音書日課は、主イエスが天に昇られたときのことを伝えるものではありません。主イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の食事を共にされた後、逮捕される直前に弟子たちの前でなされた主イエスの祈りの言葉を伝えている箇所です。そのとき、主イエスは「**天を仰いで言われた**」のです。

祈るとき、わたしたちは、手を組んで、目を閉じて祈るものだと習慣づけられているかもしれませんが、しかし、聖書の中には、そのような姿で祈る者はほとんど見当たらないようです。そのかわりに描かれるのは、手を挙げて、目を天に向けて高く上げて祈る者の姿です。主イエスもまた、そのような姿勢で祈られたのです。

弟子たちはどうだったのだろうか、と思います。弟子たちが祈る場面は、福音書には描かれていません。もちろん、弟子たちも祈っていたでしょう。どのように祈ったらよいのか分からなくて、主イエスから「主の祈り」という祈りのお手本を教えていただいたことも、一度きりのことではなかったでしょう。「祈りなさい」と言われて、教えられた言葉を用いて、祈ってみていたに違いないのです。けれども、それは、どこか主イエスの祈りと違うものだったのではないのでしょうか。まだ弟子たちの祈りは祈りになっていなかった。それで、福音書の物語の中では弟子たちの祈りの姿が描かれていないのかもしれませんが。

その弟子たちの祈りが、主イエスの祈りに近づいたとき。それが、もしかすると主イエスの昇天のときだったのかもしれませんが。主イエスが、祈るとき目を上げて、天を仰がれたように、弟子たちも、目を上げて、天を仰ぐときが来たのです。天に昇られた主イエスの御姿を追って、その見えない御姿に思いを馳せて、弟子たちは目を上げ、天を仰いだのです。主イエスが天に昇られたのは、このことのためだったのではないかとさえ思えます。弟子たちが目を上げて、天を仰いで主に思いを馳せ、主の御心を尋ねるようになるためです。主が天に昇られたからこそ、弟子たちは、主イエスと同じ祈りの姿勢へと導かれたのです。

主イエスの祈り

不思議なことに、ヨハネ福音書では、主イエスが祈られたことを明確に描くことがほとんどありません。今日の日課箇所を含めて、そもそも「祈り」という言葉がほとんど出てこないのです。けれども、だからといって、主イエスが祈られていないとも言えないでしょう。むしろ、主イエスはいつも祈っていらっしやるかのように描かれている、と言ったほうがよいのです。実のところ、ヨハネ福音書が伝える主イエスは、いつでもご自身が天の御父と一つであることを繰り返しお語りになられています。ご自身は御父のもとから来た者であって、ご自身の語る言葉も、なされる御業も、御父のものなのだと、主イエスは繰り返されているのです。主イエスは、いつでも、御父の御心をご自分の心となされていらっしやるというのです。今日の日課箇所では伝えられている主イエスの祈りの言葉でも、そうなのです。

主イエスは「**天を仰いで言われた**」。それは、このときだけでなく、いつも、主イエスが口を開くときには、そのようであったということかもしれません。いつも天を仰いで、天の御父の御心を尋ねながら、御父の御心が自分の心となるようにと求めながら、主イエスは口を開き、弟子たちの前でお語りになられていました。祈りとは、そういうものだ。祈りの生活とは、このように生活のすべてが御父との祈りの交わりの中に位置づけられることだ。そう、ヨハネ福音書は、主イエスの姿を描くことを通して、わたしたちに教えているのではないのでしょうか。

手を組んで、目を閉じて祈るとき、わたしたちは、確かに、この世の煩いから離れて祈ることができます。自分の手の働きを休ませ、見えない神に心の目を向けるのには、意味のある姿勢なのでしょう。けれども、そのような姿勢そのものが大切だとか不可欠だということではないかもしれません。

わたしは、ときに、手を組まずに祈ります。手を組むことが、自分の手が何かを握りしめ、手放そうとしない思いと結びついているように思えることがあるからです。また、わたしは、ときに、目を閉じることなく祈ります。目を閉じることが、自分の目が何か見るべきものを見ずに済ませようとし、見たいものばかりを心の中に描き出そうとする思いと結びついているように思えることがあるからです。そのかわりに、自分の両の手を開いて見せ、今まで手放そうとせず握りしめていたものを手放すように、心に促すのです。目を見開いて、見たくなかったもの、見ようとしなかったものに目を向けるように、心に促すのです。

けれども、それは、祈りそのものではないかもしれません。むしろ、そのようにして、自分の心が開かれた状態で神の御前に進み出ることこそが、必要なことなのでしょう。御父の御心を尋ね、御心を自分の心の中に注ぎ入れていただくのです。自分の思いを御父に訴えるだけでなく、むしろ、訴えるだけ訴えて空っぽになった心に、御言葉を刻んでいただくのです。御心で満たしていただくのです。

主イエスは、そのような祈りの生活を、弟子たちにお示しになられたのではないのでしょうか。そして、そのような祈りの生活へと弟子たちを導かれるために、天に昇られた。弟子たちの目が天に向けられ、心が開かれるように、と。

一つとなるために

ヨハネ福音書の伝える主イエスが弟子たちの前で最後に祈られた祈りを、「大祭司の祈り」と呼ぶことがあります。主イエスが、弟子たちのために、また弟子たちによって信じるようになるすべての者のために、御父にとりなし祈ってくださっているからです。この祈りを聞きなおすたびに、わたしたちは、わたしたちのためにも、主イエスがとりなし祈ってくださっている、と励まされます。

たしかに、主イエスは、わたしたちのためにも祈ってくださっています。今も、天の御父の右にあって、わたしたち現代に生きるキリスト者、今日の教会のために、世界のために、祈ってくださっていると、わたしたちは信じています。いいえ、究極的には、御父こそが御子のために、わたしたちのために、世界のすべての者のために、祈り願ってくださっていると、わたしたちは信じているのです。

それこそが、主イエスがこの「大祭司の祈り」ではっきりとわたしたちにお示ししてくださっていることです。御父こそが、まことの祈り、まことの願いの根源でいらっしゃるのです。御父が願ってくださったからこそ、御子は、御許からこの地上に遣わされておいでになられました。御父が願ってくださったからこそ、御子は弟子たちをご自分の後に続く者とするように導かれました。御父が願ってくださったからこそ、御子に続く者たちに聖霊の助けをお与えくださり、主の教会が建てられました。御父が願ってくださったからこそ、わたしたちも、今、教会に導かれ、御子の後に続くキリスト者として生きるようにされているのです。

大切なことは、そのことを理屈で理解することではないかもしれません。この自分のために祈ってくださっているお方がいる。主イエスが、御父が、このわたしのために、祈り、願ってくださっている。自分は、祈られ、願いを向けられて、今、生かされている。立たされている。そのことを、どれだけ深く悟り、受けとめられるか。

いいえ、自分がいかに祈られ、願いを向けられているか、そのことを知るようになったならば、わたしたちは、祈らずにいられなくなるのです。自分のために祈ってくださっている方に目を向けるとき、それにとどまらず、自分が出会わされている家族や周囲の人、見ず知らずの通りすがりの人にさえ目を向け、その人のために、祈らずにはいられなくなるのです。主イエスが、弟子たちやわたしたちのために祈ってくださったように。

自分のために祈ってくれている人の存在に気づかされる。その経験は、わたしたちの信仰の歩みにおいて欠かせない、大きなものです。わたしのために祈ってくださっている人があることで、今のわたしは、キリスト者として、牧師として、立つことができているのです。皆さんもそうでしょう。

その祈ってくれている人の背後に、その一番向こう側に、確かに、主がいらっしゃるのです。天に昇られた主が、御父と共に、祈ってくださっているのです。願ってくださっているのです。御心において一つになるように。すべての者が一つになることができるように。

そのことを悟らせてくださる聖霊が、今こそ豊かに注がれますように。